
デリーメイカーズ

加島神楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイリーメイカーズ

【Nコード】

N5848Y

【作者名】

加島神楽

【あらすじ】

中学三年生の春。

この学校に転校してきた紅咲夜は、教室の空気に馴染めずにいた。そんなある日、ふとした出来事で出会った少年少女の五人組。その出会いを堺に、彼の人生は大きく回りだす。

転校を余儀なくされた、咲夜の残酷な過去。

そして……そこに刻まれたのは幾多もの過去が重なった『呪い』。

「ねっ、すごいでしょ。咲夜君」

「お前自身も気づいただろ。何かを我慢していたことに……いや、本当はそれを望んでたことに」

「私たちのどこが変なのよ!？」

「わかったようにいうな!!」

「僕のどこが素直じゃないって言うんだ」

「どうして……お前のギターから出る音は、そんなにも悲しそうなんだよ」

「じゃあ何で我慢する!？何をおそれている!？何におびえているんだ!？」

「彼らに……僕のことなんて、わかってたまるか」

彼らが過ごした青春時代が、今、始まる。

『デイリーメイカーズ』

この作品は電子書籍サイト、E エブリスタにも投稿していますので、よろしければそちらの方もお願いいたします。

1 - 1 五人との出会い（前書き）

この作品はあくまでフィクションです。

実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1 - 1 五人との出会い

それはまだ、奇跡が起こる前の話。彼女が生まれる前の話だ。

目が覚めると、丁度4時間目の終わりのチャイムがなっていた。どうやら授業は終わったらしい。

周りのクラスメイトが、それぞれ友人と昼食を食べようと動き出す。

僕はその姿を見ながら一人、いつもの場所へと向かう準備をしていた。

くれないさくや
紅昨夜。それが僕の名前だ。

中学三年生の春、この学校の3年2組に転校してきた。

はじめは転校生ということもあり、たくさんの人に話しかけられたのだが、人付き合いの苦手な僕の性格がわかった、だんだんと話しかけてくる人も少なくなり、なんとなくクラスになじめない状態になっていた。

けれど元々、誰かと一緒にいるということが少なかった僕はあまり気にせず、転校時からずっと一人の生活を送っているのだ。

屋上へつながる扉の前にたどり着く。

僕が向かっていたいつもの場所というのは屋上だ。

この学校の屋上は封鎖されていて、誰も入ることができない絶好のスポットなのだ。

僕はその扉のすぐ隣にある窓をふさいでいる鉄格子をはずし、窓から屋上へと出る。

封鎖されていないじゃないかと思ったかもしれないが、確かに僕

が来るまではこの窓も封鎖されていたのだ。

僕がこの鉄格子のねじをドライバーで外したから、ここだけは通れるのだ。

降り注ぐ太陽の光、吹き抜ける心地の良い風、時より聞こえる小鳥の鳴き声。ここはいつ来ても素晴らしい場所だ。

窓から屋上へと出た僕は、いつもの貯水槽のところに腰を掛け、昼食を食べ始めた。

昼食を食べ終えた僕は、腰掛けていた貯水槽の下に手を伸ばし、中からギターとパイプ椅子を取り出した。

ギターはアコースティックギター。小さいころから続けている僕の趣味の一つだ。

静かな屋上で木々のざわめきを聞きながら弾くギター。心休まる時間だった。

一曲目を引き終える。調子はまずまずだ。

そろそろまた、新しい曲にでも挑戦しようかな。そんなことを考えていた時だった。

「ねっ、すごいでしょ。咲夜くん」

「ああ……これは想像以上だ」

「屋上への行き方を知っているあたり、只者ではないと思っていたが」

「くちやくちやすごいな」

「みんな……あんまり大きな声を出すと、ばれちゃうよ」

……人の……声？

そのことを理解すると同時に、自分が屋上にいることがばれてい
たことにも気づく。

いつからいたのだろうか。いや、いつから個の屋上に通っていた
ことを知っていたのだろうか。

……まあ考えても仕方がない。そう思った僕は、どこかに隠れて
いる誰かに声をかけた。

「……誰かいるの？」

少々警戒の念を含めてみる。

すると、貯水槽の裏から、物音や話し声（というより叫び声）が
聞こえたと思ったら、その集団の一人から返事が来た。

「ばれたもんは仕方ねえ。……おまえら、いくぞ！」

「もうみんないつてるよ」

「ってなんでだよ!？」

……………。

非常にぐだぐだな集団だった。

意味不明なやり取りの後、貯水槽から大きな物音がしたと思っ
たら、今度は真上から声がした。

「上を見なさい!!」

言われた通り、貯水槽の上を見える。

すると上には、五人の男女が立っていた。そのうち、一人の少女
には見覚えがあった。クラスで、アイドルのように呼ばれていた覚
えがあるからだ。

その五人が、いきなり変なことを言い出した。

「俺の心が真っ赤に燃える！！ レッド！！」

「自然を大切に！！ グリーン！！」

「いつも心に静寂を……。 ブルー！！」

「ネコと遊んでくれないか？ イエロー？」

「みんなのヒロイン ピンク…… って僕男だよ！？」

「五人合わせて」

「シンケンジャー！！」「ボウケンジャー！！」「ゴーカイジャー

！！」「ネコレンジャー！！」「デカレンジャー！！」

……………。

「ここは侍戦隊だろ」「轟轟戦隊よ！」「いや、海賊戦隊だろ」「なにいつてる。爆猫戦隊だろ！」「爆猫戦隊なんてないよね」

……………。

啞然としていた。正直、馬鹿なんじゃないかと思った。

目の前であーだこーだいつてる人たちは、本当に何がしたいんだろ。

「ああ…… 咲夜くん、もうあきれかえってるよ……」

「まずいな…… 登場にインパクトを持たせ、そのままのりで勧誘してしまえ作戦が失敗だ……」

「元々この作戦、無理があつたと思うのだけど」

「アホだな」

いや、あるいみその作戦は成功だ。インパクトはハンパなかった。
……というか、今勧誘って言わなかった？

「やあ、お前が紅咲夜か？」

「まあ、そうだけど……」

「俺の名前は風上^{かさがみかすや}一也。隣のクラス、三組の者だ」

レッドが自己紹介をする。

「同じく、宮沢^{みやざわ}慶助^{けいすけ}だ」

ブルーが言う。なんか某有名作家に似た名前だな。

「えーと。同じく直枝^{なおえりく}陸^{りく}です。よろしく」

なぜか男なのにピンクの人が言う。ピンクだが、一番まともそう
だ。

「イエローの茜美^{あかねみさ}紗^さだ」

先に宣言してくれたのは、唯一謎の爆猫戦隊を作り上げた女の子
だ。ちなみに美少女。そして……

「私の名前は……わかるか。ま、でも一応。同じクラスの夢桜^{ゆめお}沙^さ耶^や。
よろしくね」

グリーンであり、クラスでアイドルと名高い彼女が最後に言う。
アイドルと言われるだけあるかわいさだ。

けれど、今はそんなことすらどうでもよくなる事態が起こってい

た。頭の中は疑問でいっぱい、聞きたいことは山ほどあった。だから僕はとりあえず、今世紀最大の疑問をぶつけてみることにした。

「ここで何してるんですか」

「勧誘さ！」

すごいさわやかに返された。

「誰ですか」

「お前のことをだ！」

「……………何故に？」

「それはお前もわかってるはずだぜ！」

なぜさわやかに返し続ける。

しかし、僕もわかってる？ どういうことだろう。

僕がした事かな。でも僕は屋上に入ったことくらいしか……………あ！

「すみません。ここの先着で僕を口止めに殺しに来たんですね」

「いやいやいや」

「そうだ」

「なに美紗も嘘言ってるのさ！？」

どうやら違ったらしい。けれど他に心当たりなんてないぞ。

「他には何かないか」

「すみません。正直あなたたちのような変な人との関わりなんて、あつた気がまるでしないんです」

とりあえず、正直に言ってみた。

とたんに夢桜さんから反論がくる。

「私たちのどこが変なのよ!?!」

「主に言動が」

「まあ的確だね……」

五人の中で、一番常識的そうな直枝くんが賛同してくれる。ちゃんとわかってる人もいるんだ。

「まあ、あなたにもいずれわかる日が来るわ」

一生わかりたくないです。

「俺たちがお前を誘う目的……それはそのギターの上手さと、屋上に入る手段を知っているからだ!?!」

「ぶっちゃけ、後者の占めるウエイトがほとんどですよね」

「まあな!?!」

さわやかに正直な人だ。そういえば、

「ならあなたはどっやって入ったんですか」

「……来てみる」

そういつて、僕を貯水槽の裏へと誘導する。僕は黙ってついていき、裏側を見た瞬間驚愕した。

なんとそこだけフェンスが破れており、下の階の空き教室のベランダまでロープがついていたのだ。

「俺たちはこれを上って、ここに来ているんだ」

「危ないでしょ!?!」

「だからこそ、お前に入ってもらいたいのださ」

……確かにこれは危ない。いくら屋上がいい場所であるからといって、ここまで危険を冒して来ようと思う人がいるだろうか。いや、まあ目の前にいるのだが。

ここまでする人なんだ。それだけ屋上が好きって事なのだろう。教えてあげてもいいかな。

そう結論づけたところで、一つ疑問が浮かぶ。

「屋上への入り方を教えるのはかまわない。けど一つ、質問があるんだ」

「ん？なんだ？」

「どうしてそんなに勧誘にこだわるの？別に、僕に尋ねるだけでもいいと思うのに」

そう尋ねると、風上くんはすこしまじめな顔をしていった。

「お前、転校生だったよな」

その瞬間、僕は少し気分が悪くなった。こいつらも一緒なのかと。

「別に俺たちは、お前の性格にどうこう言つつもりはない。けどな

……強がりはやした方がいいと思うぞ」

「……あんた等も一緒。そうやって友達を作れとか、そんなありきたりなことを説教するのか」

「いや、ちがう。俺が言いたいのは、ただもつと素直になっても良いとおもっただよ」

「僕のどこが素直じゃないって言うんだ」

みんなそういうんだ。僕の事など何も知らず、ただただそういうんだ。

「じゃあどうして……お前のギターから出る音は、そんなにも悲しそうなんだよ」

……僕のギターの……音が悲しそう？

「たった一回盗み聞きしたくらいで、僕のギターに口出ししないで」「たった一回じゃない。初めてお前が屋上に来ていたとき……始業式の日から、毎日聞いている奴が言ってるんだよ」

「毎日……聞いている……？」

「あたしよ」

夢桜さんの声が響く。夢桜さんは……毎日聞いていた……？

「あの日、私はたまたま一人、屋上へと登っていたの。誰かいるなんて、思ってもいなかった。私はこれを、自分だけの楽しみにしようと思った。それだけ、あなたの曲はすばしかったわ」

……驚きだった。あの日からずっといたなんて。気づきもしなかった。

「それから毎日、私は昼休みに、ここではじめての曲だけを聞いていたわ。それ以外の時間は、みんなと遊ぶ時間だったから。そうして聞いているうちに、私は疑問に思ったの。どうしてこの人の曲は、こんなにも悲しいんだろうって。」

「さっき咲夜くんの弾いていた曲って、おそらく自作だよな」

直枝君が尋ねてくる。僕は肯定の意を示す。

「やっぱりだ。だからこそ、よりいっそう自分の心が曲に出ていたんだ。自分で作った曲ほど、気持ちのでやすいものはないからね」

「だから……僕は別に」

「そんなこと思っていないというのか？本当にそうなのか？お前はそうやって、自分の中で何かを怖がってるんじゃないのか？」

怖がっている……何かに……？

「俺はお前が、心から孤独を望んでいるようには見えない。お前は何かをおそれ、自分すら騙せない嘘で自分を守っているようにしか見えないんだ」

「そんなもの……！！」

「ないわけない！！お前は、本当はみんなといたいんだろう！？みんなと笑って、みんなとはしゃいで、今を楽しみたいんだろう！？じゃあ何で我慢する！？何をおそれている！？何におびえているんだ！？」

「そんなこと、君たちには関係ないだろ！？」

僕はそういつて、屋上から逃げるようにして校舎内に入る。

けれど、その行動自体が一つの答えにもなっていた。

「彼らに……僕のことなんて、わかってたまるか」

side-five people

「さすがに、いきなりすぎたか……」

「一也はそうやって、いつも急ぐ癖があるからね」

「もう少し、ゆっくりやっていくべきだっただろう」

「まあ過ぎてしまったことは仕方ないわよ。それより、これからどうするのよ？あの調子じゃ、かなりきついものがあると思うわよ」

「あいつ、そーとー警戒してくるはずだ」

「大丈夫だ。作戦は練ってある」

「どんな作戦よ？」

「それはだな……」

1-1 五人との出会い（後書き）

この度は本作品をお開きになってくださり、まことにありがとうございます。

私自身が書く初めての作品『デイリーメイカーズ』。

更新は不定期ではありますが、是非読み続けていただけたら幸いです。

1 - 2 真実までの迷走劇（前書き）

この作品はあくまでフィクションです。

実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1 - 2 真実までの迷走劇

変な連中に出会ったあの日から10時間以上経過した。用は次の日の朝だ。正直気分は全く優れなかった。

あの連中に会うかもしれないという気持ちもあつたが、それ以上に夢桜さんとの接触が一番怖かった。昨日が昨日だ。怒っている可能性だつてある。

世の中たいていの男は美少女に従うものであり、クラスのアイドルでもある彼女が、もしも僕のことを気に入らないと一言でもいったら……本格的ないじめにでもなるかな。

教科書破りとかに耐えられるほど、俺の心は強くないんだけどなあ。

そんなこんな考えているうちに教室にたどり着いた僕は、教室内の全批判視線を浴びる覚悟を決め教室にはいると

夢桜さんが僕の机で寝てました。

………は？なにこの状況？席を間違え……いやいやそんなはずはない。

とすればあの連中の仕業だろう。ならば最善策は無視。

そう心に決め僕の机に鞆を置き、競歩選手ばりの速度で通り過ぎようとしたとき、

「ちょっと無視はひどいでしょう！昨日の夜さんざんやっておいて
」

………。

何という爆弾発言でしょう。教室の時間を一瞬にして止めてしまった。

「あんなに恥ずかしい思いさせて……私だって初めてだったんだから！」

停止時間延長……。

どうやら彼女には、時を止める力があるようです。あと僕の心の平穏を侵す力。

「……どういうことだああ！！紅！！」

止まっていたときが動き出した瞬間、一斉に叫ばれました。お前たちが叫んでんじゃねーよ！！僕だって叫びたいわ！！

「なんてことしてくれてんのさああ！！」

はい叫びました。叫びましたよ。叫ばずにはられないじゃないですか。

「だって咲夜くんがあつまんま私を放置していったせいで、後処理大変だったんだから「ちょっとこっちに来てもらってもいい」ってやだ咲夜くん、大胆なんだからもう」

なんかさらに話し出したので、その夢桜さんの手首をつかみ、全力で教室から引つ張りだした。

後ろからすごい勢いで叫びのようなものが聞こえてきたけれど、全部聞こえないふりをさせてもらった。

こっちだって理解不能なんだ。答えられるわけがないのに。

「で、何であんな事をしたんですか。夢桜さん」

夢桜さんを引っ張って教室を出た後、僕はその勢いで裏庭へと来ていた。

木々に囲まれたこの場所は、人がめったに来ない場所。ましてや、HR前にわざわざ来る人などいるわけがないため、僕はここに連れてくることにしたのだ。

「私は事実しかいってないわよ」

「言い方ってものがあるでしょ!？」

あれじゃあ、誤解してくださいっていったようなものだ!!

「だってわざとだもん」

「確信犯かい!!」

もうむちゃくちゃだった。

絶対に関わるまいと思っていた朝の決意など、いつの間にか月の裏まで飛んでいった。

「で……こんな事をしてまで呼び出すって事は、また昨日の集団がらみだろ」

「ご明察だな」

後ろから突然声がしたと思ったら、いつの間にか、風上が後ろに立っていた。

「僕を社会的に抹殺できるような行為までして、どういうことだ？」
「あれ、いい作戦だろ」

「こっちは大迷惑だ！！ おかげでいやな注目を浴びたよ」
「ははっ。お前も俺たちのチームに入れば、こんな事当たり前になるさ」

「……何度も言ってる。入る気はない」

「まあそう言うな。お前に用があるんだ。屋上まで来てもらいたい」
「……断るといったら」

「力付くで」

無言の緊張が漂う。

僕はこいつを殴って逃げようか考えた。それくらいの腕はあるつもりだ。

「具体的にはここで、沙耶に咲夜に襲われたとでも叫ばせる！」
「卑怯だろ！？ 力付くってそう言う意味か！！」

逃げようがないだろうが！！

「決まったな。昼休み、ついてきてもらっぜ」

風上くんはそう言って、僕に背を向け歩き去って行った。

……どうやら、行くしかないようだな。

「無理矢理やつちゃってごめんね」

落胆している僕に、後ろから夢桜さんが謝罪を入れる。

「いいよ別に。ただ、だから何があるってわけじゃないけど」

「……きつと入ってくれと信じてるわ」
「……………」
「勝手に信じてください」

意志を変える気はなかった。

だって僕は、そんなこと許された人間じゃないのだから。

「ところで、夢桜さんのあの発言は大丈夫なの」
「あはは……………」
「あとか大変そうだね……………」
「……………」

じゃあそんな作戦やるなよ。

spot change

昼休み。風上さんと夢桜さんにつれられ屋上に来ると、昨日いたメンバーが全員集まっていた。

「遅かったな、一也」
「待ちくたびれたぞ」
「咲夜くん。無理矢理呼び出してごめんね」

三人がそれぞれ声をかける。というか、悪いと思うなら呼び出さないでくれ。

「さて、みんなそろったことだし、咲夜の演奏会を始めるか」
「……………」
「はい？」
「咲夜くんの演奏会よ」
「いや、別に聞き取れなかった訳じゃ……………」
「なんで」

「俺たちが聞きたいからだよ」

「……まあいい。嫌だといってあきらめるような連中じゃないだろうしな」

「まあな」

そんなところを認めるなよ。

僕は心の中でそう突っ込んでおき、ギターを取り出した。

「それじゃあ……何かリクエストは？」

「………いつもので」「………」

五人の意見が一致する。

……お前等打ち合わせしてただろう。そして僕はバーテンか。

「………了解しました」

そして僕は弾き始めた。

いつも通りにギターを弾く。こうして人の前で弾くのも、久しぶりなものだ。

あの一件以来、人と関わる事がなかったから。

演奏をしながら、僕は目の前の五人の顔を眺めてみる。

左側に座っている宮沢は、目をつぶり、まるで瞑想をしているかのように聞いている。

右側の茜さんは、眠たそうな顔で……いや、寝てるよ。

そんな茜さんに、直枝は必死で起きるように耳打ちしている。あ、茜さん起きた。なんかすまなそうな顔をしてる。

宮沢の隣に座る夢桜さんは、すごいきらきらした目でこっちを見ている。

悪霊を一瞬にして浄化されそうなくらいのきらきらだ。僕に向けるにはもったいない。むしろ僕が浄化されそう。

そして、一番はじめに真ん中に陣取った風上は、優しい目をしながら僕の演奏を聞いていた。

……なんだろう。すごい懐かしい風景だ。

あの時も、みんなこんな風に聞いていたな……。

昔のことを思い出してしまったからだろうか。僕は柄でもなく泣き出しそうになってしまう。

けれど、こんなところで泣くわけには行かないと、涙を我慢して演奏を続けようとした。

だがしかし、そんな状態で引き続けることができるはずもなく、僕は演奏を止めてしまう。

……こんな事になったのは初めてだった。

「……そういうことだ、咲夜」

不意に、僕に声がかかる。僕が顔を上げると、目の前に五人が立っていた。

「そういうこと……って」

「お前自身も気づいただろ。何かを我慢していたことに……いや、本当はそれを望んでたことに」

「つつ!」

僕は目の前の男……風上にすべてを悟られてしまったような気がした。

それは僕のもっとも知られたくない……もっとも思い出したくない部分だと考えつくのに、そう時間はかからなかった。

「わかったようにいな!!」

脳内が不安と恐怖に支配された僕は、気がついたら風上に殴りかかっていた。

だが、そんな錯乱状態の攻撃が当たるはずもなく、あっけなく避けられてしまい、僕はその場で膝を突いてしまう。

そのことに対するショックもあっただろう。

僕は決するという必要の無かった事実を、まるで自分を苦しめたいかのように、勝手に叫びだしていた。

「みんな死んだんだよ!!僕と関わったせいで、みんな死んじゃったんだ!!」

1 - 3 デイリーメイカーズ（前書き）

この作品はあくまでフィクションです。

実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

1 - 3 デイリーメイカーズ

「僕だつてみんなと一緒にいたいよ！！みんなと笑っていたいよ！でもそうしたら、みんな死んじゃうんだよ！！僕の両親は九歳の時に、事故で亡くなった。小学校の頃の親友も、通り魔に刺されて死んじゃった。中学の頃のクラスメイトは、僕が休んだ学年旅行でみんな死んだ。僕と仲良くした人は……みんな死んじゃったんだよ！！」

この学校に引越してきた理由も、僕以外のクラスメイトが全員亡くなってしまったから。

いわば、やっかい払いのような形でここへ来たのだ。

「……………」

屋上が沈黙に支配される。

さすがに、誰も声が出せなかったようだ。

今更になつて、後悔の念が押し寄せてくる。言う必要はあったのかと。

そうして数分、その沈黙を破つたのは直枝だった。

「僕の両親もね……もう死んでいるんだ」

「えっ……………」

「君より少し後の、十歳の頃に。ぼくもね……そのときは一人、家の中に引きこもった。家中のカーテンを閉め、暗い部屋の隅、ずっと親の写真を見つめていたんだ。そのときの僕は、何もかもに絶望していた。けど、その状態から救ってくれたのが一也たちだったんだ」

「ここからは俺が代わろう。俺はあの日、ふとした噂を聞いたんだ。

両親を亡くした少年の話を。俺は最初、興味本位でそこを訪ねた。その頃、俺は両親のことが嫌いだったからな。その両親を失うとどうなるのか、興味があっただろうな」

side - kazu ya

（ここがその部屋だな）

俺はその扉を開け、中に入る。

その部屋はベランダに面している、リビングのような部屋だった。

（だれもいないのか……？）

周りを見回してみる。はじめは見つからなかったが、よく見てみると……

（うおっ……！！）

部屋の片隅に佇む少年を見つけた。

その少年は全くこちらに気づいていないどころか、何も見えていないように見えた。

その目には色がなく、呼吸をするのも忘れていたかのようだ。

（こんなにもなっちまうもんなのか……）

そのとき、俺は激しい後悔に襲われた。

目の前で絶望を抱いている少年を、興味本位なんかで見に来てしまった自分に。

そして、

(こいつを俺は……助けてやりたい)

俺はそう思った。

side change - rikku

僕はあの日も一人、部屋の隅に佇んでいた。

ここ数日ろくな物も食べていなかったが、そんなことはどうでも良かった。

両親が死んだ……もう戻ってくることはない……。

僕の心は、空っぽになっていた。

(ドンドン……ドンドン……)

ベランダの窓を叩く音が聞こえる。

(後見人の人かな?)

僕はベランダの方へと、ふらつく足を進めた。

冷静に考えれば、後見人の人が窓から来るわけがないとわかっただろう。

けれど僕には、こんなことを理解する余裕すら無かったのだ。だがそれが……その判断が、僕の運命を大きく変える。

ベランダのカーテンを開ける。

久しぶりの日光の光に、僕は思わず目をつぶってしまふ。

だがそのとき、部屋に写る影を見て外に誰か行することに気づく。

その方向を見てみると……

窓に男の子が張り付いていた。

(うわっ！！)

僕は驚き、思わず後ろに倒れてしまう。

窓に張り付いていた男の子は、僕がいることに気づいたのか、しきりに何かを言ってくる。

(こ・こ・を・あ・け・て・く・れ？)

僕は、言われたとおり窓を開けた。

「ふうー。ようやく気づいてくれたな」

「……誰？」

「俺か？俺は風上一也だ。そんなことより、お前の力が必要なんだ」
「僕の……？」

「ああ、そうだ。というわけで、一緒に来てくれ！！」

「えっ……でも……」

「大丈夫だ。何も心配はいらない。お前は俺に……いや、俺たちについてきてくれれば良いだけだ」

「俺……”たち”？」

「そうだ。向こうに俺の仲間がいる。みんなもお前を待っている。だから一緒にいこう。またもう一度、外の世界へ！！」

初めて会う人だったけど、僕はなんだかこの人ならきつと、僕のことを救ってくれる。

そんな風に思った僕は……

「……うん。いくよ」

「よし！じゃあみんなのところへ行こう！！」

一也に、ついていくことにしたんだ。

「そのまえに……僕おなかが空いたよ」

「ははっ。じゃあまずは腹ごなしからだな！」

「……うん！」

Side return

「あの時、僕は一也に救ってもらったんだ。両親を亡くし、絶望の淵にいた僕をね」

……言葉じゃ表せないほどの驚きを覚えた。

こんなにも楽しそうな人たちの過去に、そんなことがあったなんて思いも寄らなかった。

「咲夜さんの悲しみは、きつともっと深いんだと思う。けれど咲夜くんは、僕とは違って現実に絶望していない。きつと君の中に、何か支えになる物があったんだよね？」

……そうだ。

「僕も何度も絶望しかけた。けれど……僕にはこれが……ギターがあったからこそ、絶望せずにいられたんだ。僕にはギターだけが、唯一消えずにすんだ物だから」

そう……逆にいえば……僕にはもう、これしかないんだ。

「ならば。俺たちが次の挑戦者つてところかな」

「そーだな。あたしたちはそーなるのかな」

「……えっ？」

「何度も言っているだろう。俺たちはお前を、勧誘しにきたって」

「うん。僕たちはいくつもの困難を乗り越えてきてるんだ。……あの時だって」

「でも……また……」

「空き教室からロープで屋上くるような連中が、そんなに簡単に死ぬと思ってるの？」

「……………」

「いいのよ。無理しなくても。もっと頼りなさい。もっと自己中心的に行きなさい。何が事故よ！どーんと来いよ！！」

「いやいや、きちゃダメでしょ」

「そういう気分ってことよ、陸くん」

……本当にいいのだろうか。

ほんとうにまた、人と時間を共有してもいいのだろうか。

僕がそう思っていると、それを見透かしたかのように、風上がいった。

「俺たちは決して同情や哀れみなんかで誘ってるじゃない。ただお前といると、すげー楽しそうだからさ。だから咲夜、一緒に行こう。もう一度……外の世界へ！！」

風上が、僕に手をさしのべる。

周りで四人が頷き、僕に手をさしのべている。

僕は……

「……うん！よろしくね……みんな！！」

その手をとって、また歩み出すことにした。

五人は大きく頷いた後、大きな声で笑いだした。僕もたまらず、みんなと笑いあった。

丁度そのとき、昼休み終了のチャイムが鳴った。

「……ねえ、もうみんなでさぼっちゃわない？」

「おっ、いい事言うじゃねーか、咲夜！」

「そうね咲夜くん！もうここで野球しましょうー！！」

「野球か！！おっしゃー、きたああ！！」

「まあいいんじゃないか？」

「いやいや、無理だって」

「傘がバットで新聞紙丸めたのボールでならいけるよ！」

「咲夜くんもなんでそんなノリノリなのさ！？」

……最高にうれしかった。

青空の下、またこんな風に騒げる日が来たことが。

渴望していた日常を、青春を、与えてくれたこの人たちには、感謝の気持ちでいっぱいだった。

………そういえば

「ねえ、かざ……一也！！」

「どうした？」

「君たちは……いや、僕たちは何者なの？」

「おっと、言っただけだったな。………そういや、あん時もそう聞かれたんだっけ」

『ねえ、一也くん。君たちはいったい何者なの？』

『俺たちか……そうだな。俺たちは、日常を楽しむためにある集団、人呼んで……』

『「ディリーメイカーズだ!!」』

2 - 1 一也からの提案（前書き）

この作品はあくまでフィクションです。

実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2 - 1 一也からの提案

「なあ。俺たちっってもう三年だよな」

僕がデイリーメイカーズに入ってから半月ぐらい経った。

あれから僕たちは放課後、教室か屋上に集まるようになっていた。基本的には自由に過ごし、時折僕の演奏を聞いていたりした。たまに一也が何かを言い出し、それで遊んだりもしていた。

そして今回も、一也が何かの前ぶりのように切り出してきた。

「何を当たり前な」

「じゃなかったら、あたしたちは何なんだ」

「急にどうしたのさ、一也」

慶助、美紗、陸が順に反応を返す。

「いやさ、もう俺たち今年から受験生だろ？ ってことはさ、こうして自由に遊んでいることも出来なくなっちゃうじゃねーか」

「まあ、そうだね」

「私たちも、受験勉強しなきゃいけないのよね……」

僕はまだ半月ほどしか一緒に過ごしていないけど、こうして遊べなくなってしまうことは、とても悲しいことだと思うくらいだ。

きっとほかの五人は、僕以上に悲しい気持ちなのだろう。

「だからよ、この学校での最後の思い出として、俺は何かデカいことをやりたいと思っているんだ。ここ最近、何か大きな事をやってないしな」

確かにそうだ。僕は以前というものをあまり知らないが、この半月でやった大きいことといえば、学校全体を利用したサバイバルゲームくらいだ。いや、それすらもこの人たちにとっては、小さな遊び程度なのだろうが。

「と、いうわけだ。俺は今、猛烈にデカいことがやりたい!!」

同感だった。おそらくみんなも同じ様に思っているだろう。それと同時に、これから一也がまた、何かおもしろいことをしようと考えていることもわかった。

そして僕は、それが始まるのが楽しみになってくる。
だから僕は、一也にこう尋ねた。

「それで、いったい何をしようとしているの？」

それは僕らの、一也の行動に対する肯定の合図でもあった。
それを受け取った一也は、笑顔で僕たちに答えを返した。

「バンドだ、みんなでバンドを作るぞ!!」

「そして俺たちは、学祭の伝説になる!!」

その言葉で、これから始まる物語の……僕たちの物語の、引き金
が引かれた。

いくつもの形を束ねる、始まりの物語だ。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。これで、今日一日の授業は終わりだ。

僕は放課後に向けて、机の上に置かれている教科書をしまう。

「やっと授業が終わったわね」

沙耶さん（僕がデイリーメイカーズに入った時、みんなのことは名前で呼ぶよう強制されたので、今はそうして呼んでいる）が僕の方へ歩み寄ってきた。

「今日は特に疲れた気がするよ」

「ほんと。ずっと机に向かっているなんてね」

「実技科目、一つもなかったもんね。今日」

「はあー、ずっと自習ならいいのに」

そう愚痴をつぶやきながら、僕の目の前で大きく伸びをする。

……かわいい。その一挙一動が絵になるかわいさだ。沙耶さんを風景画に取り込むだけで、きつとその絵はお花畑になるんだろうなと思った。ついでに鑑賞者の頭の中も。

「そういえば、一也は何をたくらんでいたんだろう」

「さあ、一也の考えることなんて予測不能だわ」

「まあ……だよな」

あの後「明日の放課後、俺たちの教室に集合だ。楽しみにしてるよ!」と、一也は僕たちに言い残し、ロープを使ってこの場を去って行った。

何でわざわざロープを使ったのかは、去り方がカッコいいからだ
そうだ（本人談）。相変わらず訳のわからない。

まあそういう訳で僕たちは、具体的な話を何一つされていなかった。

「ま、とりあえず行こうか」

「そうね。聞けばわかるでしょうし」

多少疑問が残るものの、聞けばわかるだろうという結論に達した
僕は、一也の教室へと向かうために席を立った。

「ん、きたか」

僕らが教室の入口についたことに気づいた一也が、僕らに教室に
入るよう手を動かした。

「あれ、陸と美沙さんは？」

教室に入ってみると、その二人がすでにいなくなっていたので、
それについて尋ねてみる。

「あの二人なら、もう先に行ってるぞ」

「なんでも、準備とやらがあるそうだ」

二人が交互に答えてくれるが、その中に一つ、何かを示すような単語が含まれているのに気づく。

「準備？ 聞いてないわよそんなこと」

沙耶さんも同じ事を思っていたようで、代表して質問する。

「そういえば、二人は知らないんだっただな」

「その口調だと、慶助は何があるのか知ってるって事？」

「そうなの？ ずるいじゃない！ 同じクラスだからって先に知ってるって!!」

沙耶さんが大声で抗議をすると、二人は顔を合わせ、そろって苦笑いをした。

「いや……実はだな。今朝、美紗が学校に来るなりな」

く以下回想く

「お、美紗。今日は学校に来るの早いじゃないか」

「……………」

「ん、どうした？ 美紗？」

「……やく」

「ん？」

「勿体ぶらずに早く教えるわけー!!」

「うがつ……………」

「回想終了」

「という感じで、いきなりハイキックを食らわせてきたんだ」

「「あー、なつとく」」

沙耶さんと声がかぶった。なんか声がかぶるって、ちょっとうれしかったりするよね。

「だからとりあえず、今からいうことを手伝うという条件で、教えてやったんだ」

「そのときに、慶助たちも聞いたと」

「そういうことだ」

まあ、確かにあの美沙さんの性格で、一日お預け状態に耐えられるわけがないだろう。きっと家では悶々としていたに違いない。

悶々の使い方、違うかな。

「というわけで、只今あの二人はお手伝い中ってわけだ」

一也がそう締めくくろうとするが、僕の中には新たな疑問が浮かぶ。

「なんで陸も手伝ってるの？」

すると今度は三人が、それも苦笑いではなく含み笑いのようなものをしていた。

え、もしかしてわからないの僕だけ？

ロンリーボク……ちょっと寂しい雰囲気肩書きだ。

「そういえば、咲夜に教えてなかったな」

「いわれてみれば、そうだったわね」

三人は、納得したようにうなずいている。

「何？ なにか隠し事でもあるの？」

「そう言う訳じゃない。……まあ、咲夜は知っておくべきだろう」

何だろうか。何か僕が入る前にあった事なのかな。

「なんとなく気づいていたかもしれないが、あの二人は付き合っているんだ」

「……………へ、まじ？」

「まじまじ」

……………知らなかった。いや、何となく仲良いなーとか思ってたはいたが、まさか付き合ってたとは。

「意外と攻めるんだね、陸」

「いや、いったのは美沙の方からだ」

「ええ〜！？」

あの美沙から！？ 一日のお預けにも我慢できない、カップゼリー大好きなあの美沙から！？

「いや、カップゼリーは関係ないだろう」

モノローグへの的確なツッコミありがとう、慶介。
しかしね〜。なにがあるかわからんもんだ。

「美沙ねらってたのなら残念でしたね。もうあの子、彼氏持ちよ」

いや……まあ美沙さんもかなりかわいいけど僕としては……。

僕はそれとなく、沙耶さんの方に顔を向ける。

「……………」

沙耶さんは全く気づいてくれなかったが、男二人は気づいたようで、顔をニヤつかせている。

あ。二人が親指を突き立てながら、笑顔で任せると口パクしている。

……不安要素しか見あたらないと思っっているのは、きっと僕だけじゃないだろう。うん、ものすごく不安だ。危険な空気が、僕を取り巻き始める。

「ま、とりあえず行こうぜ」

そういつて、一也は僕たちのことを促す。

「行ってくて、屋上にかしら？」

「いや、屋上じゃない。行くのは俺たちの部室だ」

「部室！？」「」

またもや二人の声が被る。今のはまあノーカウント。驚かずにはいられないからね。

最後の最後まで教えてもらえなかった僕らは、お互いに首をかしげながら、一也の後についていくのであった。

2・2 見つけ出した部室（前書き）

この作品はあくまでフィクションです。

実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2 - 2 見つけ出した部室

教室を出た僕たちは一也と慶助につれられて、旧校舎の廊下を進軍中だった。

目標は不明、ただただ前進あるのみ。

この学校には校舎が二つある。

僕たちの教室や授業の際に使用する実習室などがある新校舎と、主に文化部の部室や空き教室が数多く存在する旧校舎がある。

ちなみに、僕たちが毎日のように通っている屋上は新校舎の方で、旧校舎の方は階段に机が積まれていて、全く通ることができない状態なのだ。

新校舎の屋上の方が、広くてきれいだしね。

「よし、着いたぞ。ここが俺達の部室だ」

どうやら到着した模様で、一也が一つの部屋の前で足を止める。その部屋の上には、

「……軽音部室？」

「こんな部活、うちの学校にあったかしら？」

この学校に転校してくる際、一通りの部活動には目を通したはずだが、そのような部活には全く覚えがなかった。

「まあ、去年廃部になった部活だしな。それまでもほとんど活動なんてしていなかったようだしな。知らなくて当然だろう」

一也の答えを聞き、僕が知らないことに納得する。

この学校に転校してきたときには、既になくなっていたのか。

「よくこんな場所が見つかったわね」

「バンドを始めるにおいて、必要なものがそろっている場所はないかと探してたらな。運良くこの部室が見つかったんだ」

「大変だったでしょ、それ」

「なに、俺はこういうことが得意だからな。むしろ楽しいくらいだったぜ」

さすがは一也だと思った。

この半月で、リーダーである一也の性格がだいぶ掴めてきていた僕は、あらためて一也の凄さに感服した。

「ま、とりあえず中に入るぞ」

そういつて一也は扉を開け、僕たちを中へと招き入れた。

「意外と広いんだね」

僕がこの部室(?)に入って、最初に抱いた感想だった。

部屋の中にはカラーボックスが一つと机がいくつか。それ以外はなにもない所為で、よけいに部屋が広く見えた。

「元はこの部屋も教室の一つだったんだ。確か旧視聴覚室だったはずだ」

「それならかなり広くても納得がいくわね」

「よくこれだけの部屋を、活動なしの軽音部がとれたものだ」

「結成当初はかなりの人気だったらしいぞ、慶助。まあ、それも十年くらい昔のことだがな」

「その当初の栄光のおかげで、この部室に居続けられたってところか」
「じゃあもう軽音部がなくなった今、どこかほかの部活がここを部室にしようと思うんじゃないの？」

「その前に俺がこの部屋を押さえた。だから心配することはない、咲夜」

「さすがは一也だ」

「手回しが早いことね」

一也の活躍のおかげで、どうやら僕たちはこの部室を手に入れたらしい。

こういうことのすぐできる一也には、常に感謝しっぱなしだった。

「そういえば、楽器はまだ無いの？」

「ああ、それについてなんだが……」

一也が何かを言いかけたとき、丁度一也の携帯が鳴り出した。

「おっ、もう終わったのか。……もしもし、俺だ。……さすが陸と美沙、仕事が速い……了解、今から向かう……大丈夫だって。男手が四人もいるんだ。何とかなるさ……おう、それじゃあな」

一也が携帯を閉じ、再び僕らの方を向く。

「というわけで、陸たちの準備が整ったらしいからな。今から二人の元へ向かうぞ」

「どういつ訳なのか、さっぱりわからないわよ」

「あれ？ 今説明しなかったっけか？」

「その説明の途中で電話が来たんじゃないの！」

「そーだったそうだった。悪い悪い」

一也、たまにこういう大事なところを抜いて、結論だけをいつてしまう癖がある。

きつとせつかちな性格なんだろうと僕は思っているが。

「けれどまあ、もう準備が整ったとなれば現地で説明した方が早い。ちゃんと向こうで説明するから、今はとにかく行こうぜ。二人をあまり待たせるわけには行かないからな」

またもや重要なことを隠された状態で、一也は部屋の外へと歩き出す。

慶助もそれに従って教室を出ようとする。

「とりあえず……どうする?」

「行くしかないでしょう。はあ……なんであいつは、こつも勿体ぶつて話すのかしら……」

「あつはは……それを楽しんでいる節もあるしね」

「今度、私たちが何かあいつをじらすようなことをしてやりたいわ」

「とにかく行こうか。どこに行くのかはわからないけど」

「気分はミステリーツアーってところね」

「そう考えると楽しいかも」

知らない場所（といっても校内だが）を旅するツアー気分の僕たちは、一也という勿体付けるガイドの元、次の目的地へと足を進めるのであった。

一也に連れられて向かった先は、一つ上の階にある教室だった。教室の扉には大きな張り紙があり、そこには「軽音楽部倉庫につき立入禁止」と、書かれていた。

「ここであいつらには仕事をしてもらってたんだ……陸、入るぞ？」

ひとこと断りをいれた一也が、教室の扉を開く。

この教室は何か特殊なことに使われていたらしく、教室二部屋分の広さがあった。

「「「おお……」」」

けれど、僕以外の三人から漏れた驚愕の声は、それとは違う別のところからきていた。

教室内には、ギターにベースにキーボード、他にも、アンプやマイク、ドラム等のバンドに必要な器具が、総計数十個以上もきれいに並べられていた。

企画者であり仕事を頼んだ張本人である一也も、さすがにこの数は予想していなかったらしく、驚きを隠せないでいた。

「いや、まさか……。こんなにもあったとは」

「陸も美沙も、さぞかし大変だっただろう」

一也が素直に感想を漏らし、慶助が労いの言葉を掛ける。

「ああ……しょーじき、かなり疲れた」

「美沙がんばってたもんね」

「ああ、いくつか壊してしまったがな……」
「あつはは……あれは仕方がないよ」

いつも強がってぜんぜん平気だと言い張る美沙さんが、素直に疲れたといったあたり、よほど大変だったのだろう。

隣で美沙さんを労る陸も、かなり疲れた表情をしているし。

「二人とも、お疲れさま」

「ん、がんばった」

「うん、ありがとうみんな」

「礼を言うのは、むしろこっちだな」

陸と美沙さんの顔に、活力が戻ってきている気がした。

「んで、これだけの楽器を、一体どうするんだ？まさか、全部運ぶわけではあるまい」

「この量を運ぶなんて……無茶だわね」

「陸と美沙さんはもう、疲れて動けないだろうからね」

「そんなことはない！ 私はまだまだ元気だ！」

美沙さんが反論してくるだけの体力が戻ってきたころ、慶助が今後についてを一也に尋ねた。

「さすがにこの量を運ぶのは無理だ。それに、この中の全部が全部使えるとは限らない。壊れているものもあるだろうしな」

「確かに……いくら廃部したのが去年とはいえ、きつともっと前か

ら備品としておかれていたのもあるだろうしね」

「アンプ……だったかしら？　そういう機会だって、音がでるとは考えづらいわね」

一也の冷静な分析に、陸と沙耶さんが反応する。

機会系にめっぽう弱い美沙さんと慶助は、お前たちに任せるという態度で話を聞いていた。

「と、いうわけだ。今から俺達で、それぞれの楽器や機材がきちんと動くかどうかを確認したいと思う」

それを聞いた瞬間、美沙さんと慶助があからさまに嫌そうな顔をした。

「そう露骨に嫌そうな顔をするな、二人とも。ぶっちゃけ俺だって、壊れているのかを見分けるのだって難しい。ギターはやってみたことはあるが、他はさっぱりだからな」

「じゃあ一体どうするっていうの？」

沙耶さんが質問をすると、一也が僕の方を向き、僕の肩をつかんできた。

「俺達には今、ここに楽器のスペシャリストがいる！　今回はそのスペシャリストにお願いし、ここの楽器の点検をしたいと思います！」

四人が一斉に、おおーといった顔をする。

「まあ、こうなるとはわかってたけどさ……この数を全部僕がやるの？」

「俺達もいろいろ指示されれば手伝えるが、なにをすればいいかを

知っているのは咲夜だけだ。よろしく頼むぜ」

「いや……まあ、いいんだけど……」

さすがに一人で数十個を確認するのは、無謀じゃないのかな。

「安心しろ。お前には特別給与をつけてやるから」

「いつからこれはバイトになったのさ」

「そうだな……時給950円でどうだ？」

「そういう問題じゃないでしょ！？　あと金額がかなり現実的だね
！」

「それくらいのこととはしてやるってことだ。何なら、沙耶をお前に
あげてやってもいいぞ？」

「沙耶さんをそんなホイホイと使わない！！」

「じゃあ逆に脅迫だ。沙耶を安易に売り出してほしくなければ、全
て頼まれてくれるか？」

「外道だ！　外道な人がここにいます！」

――也にさんざんにいじられ、周りのみんなが笑い出す。

――也の冗談だとわかっていても、つつこまずにいられないのはき
つと性分なんだろう。

「まあ冗談はさておき、今度なにかしらで埋め合わせはしてやるか
ら。な、頼む！」

――也が両手をあわせて僕を拝み倒す。

「いや、別に元から手伝う気ではいたけど……まあ埋め合わせの方
は、期待せずに待つよ」

「よし、じゃあ決まりだな。お前ら！　今から咲夜の指示に従って、
順に点検作業を開始する！」

「「「「「おおー!!」「」」」」

陸、慶助、美沙さん、沙耶さんが、それぞれ行動を始める。
まだ指示を出していないのに、各自適当に楽器をいじり始める。
よほど触ってみたかったんだろう。

自らからにじみ出る、好奇心を抑えようとしないうその姿は、まるで新しいおもちゃを買い与えられた子供のような姿であった。

「咲夜、あいつらが楽器を壊してしまう前に、指示と点検を始めてくれ。俺はお前に付きつきりで作業に手伝わせてもらう」

「わかったよ、一也。……えーと、それじゃあまず……」

デイリーメイカーズみんなで始めた点検作業は、完全下校時刻ぎりぎりまで費やして、ようやく終わることができた。

2 - 3 そして新たな挑戦が始める（前書き）

この作品はあくまでフィクションです。

実際に存在する人物、団体、国家、事件、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

2 - 3 そして新たなる挑戦が始める

「いやー。思いの外、時間がかかったな」

「あの量を咲夜くん一人に点検させたからよ……咲夜くん、疲れてない？」

「僕は大丈夫だよ。それよりも……美沙さんの方が……」

「陸……あたしはもう……やりきったんだよ……」

「うん、そうだよ。美沙は本当にがんばったよ！」

「そうか……それは……よか……った……」

「美沙！だから道路で寝オチしちゃだめだってばー！」

「……なんか、美沙さんが死ぬ寸前みたいだね」

「あいつ、やり遂げた顔をしてるぜ……」

「武士の末路のようだな……」

「美沙、よほど疲れてたのね」

完全下校時間がきてしまった僕たちは、ひとまず使えるものを厳選した楽器を運ぶのは明日にすることにし、僕たちは下校をしている途中であつた。

だんだんと日が沈む時間が遅くなっているとはいえ、まだ五月の半ばでしかないこの時期は日の進みも早く、あたり一面は夕焼けの光で赤く染まっていた。

「さて……鈴が寝てしまう前に、俺から今日一番の重大発表がある」

「今日は発表の連続だね」

「今日はこれが最後だ。まず一つ、俺たちのやるバンドのパートを

発表したいと思う！」

「……おおー!!」「……」

「もう一也の方で決めていてくれたんだ」

僕も楽器点検をしている時から、誰がどのパートをやるのか気になつてたんだよね。

「まずはギター、まあわかつてはいるだろうが俺と咲夜が担当だ」

「咲夜はギターのスペシャリストで、一也は元ギター経験者だからな」

「適任って感じよね」

「頼んだぞ、咲夜」

「うん、精いっぱい頑張るよ」

「次にベースは……陸、お前だ！」

「僕がベースか……咲夜、わからないところがあったら、その都度よろしくね」

「任せといて」

「陸、がんばれな……ムニヤ」

「美沙!もう少しだから、ね!」

「そしてドラム担当は、慶助! お前だ!」

「よっしゃ来たああー!!」

「慶助、すごいドラムをやったそうにしてたもんね」

「ああ。あのパワフルな感じが楽しそうだな!」

「慶助すごい元気ね」

「次にキーボード担当……美沙だ!」

「美沙、ピアノの経験者だものね」

「へえ、それは知らなかったよ」

「………すぴー（寝息）」

「美沙、歩きながら寝ちゃったよ!？」

「器用な奴だな……」

「美沙、起きて! 起きて!」

「うつ……あたしは一体……」

「よかった……起きたよ」

「最後にバンドの花形ボーカルは……沙耶、お前だ!」

「私がボーカル……がんばってステージを盛り上げて見せるわ!」

「お前の美声に期待しているぞ」

「沙耶、ボーカルがんばってね」

「まっかせなさい! 咲夜くんだけがスペシャリストじゃないって、教えてあげるわよ!」

「沙耶は歌が上手だからな」

「カラオケで、99・999点を繰り出した実力者でもあるからな」

「それすごすぎ!」

「もう一つ、俺から大事な発表がある」

「もう一つ?」

もう一つの発表って、一体なんだろうか。

沙耶が相手のセリフをそのまま繰り返して尋ねると、一也が何か

新しい遊びを思いついたときにする、悪い笑顔になった。

これはあれだ……きつとまた何か、一也はとんでもないことを言い出すに違いない。

僕がそう思いながら答えを待つと案の定、一也はとんでもないことを発表した。

「文化祭でオリジナル曲二曲の、完成発表会を行うからな」

「……文化祭で?!?!?!」

「ああ！ やはりやるからには、たくさんの客に見てほしいもんだろ！」

「でも文化祭って来月末だよ!?!」

「あと一ヶ月半しか無いぞ!?!」

「俺と陸は素人だぞ!?! 大丈夫なのか!?!」

僕はまだしも、他のみんなは一ヶ月半って……日程的には大丈夫なんだろうか。

「なに、俺達には咲夜がいる。余裕だつて」

「……あゝ、それなら安心だ」

「さつきから思ってたんだけど、何でそんなに僕を盲目的に信頼してくれるの?」

信頼してくれることはとてもうれしいのだが、これほどまでに信頼されることを、何かしただろうか。

「そりゃあ咲夜、あれだよ」

「咲夜くんが私たちの仲間だからよ」

「仲間……」

「それに、咲夜は音楽のスペシャリストだからな」

「咲夜の音楽の知識は、僕たちの誰よりも信じられるからね」

「みんな……」

単純にうれしい、僕はそう思った。

仲間だというだけで信頼してくれる彼ら。僕はそんな彼らの期待に応えたい。僕をその仲間に加えてくれたみんなからの信頼に応えたい。

心の中で、絶対に成功させようという気持ち^①が沸き上がってきた。

「うん……文化祭、がんばろうね！」

「もちろんだ！」

「俺も本番までには、ドラムのスペシャリストになれるよう練習だ！」

「僕もみんなについていけるようがんばらないと」

「あたしの腕を見せつけてやる！」

「私だって、だてにカラオケで99・999点取ってないって、観客に見せてやるわ!」

みんなの心も固まり、本格的にやる気が出てくる。

「最後に一つ、今日結成されたバンド『デイリーメイカーズ』で、文化祭を盛り上げてあろうぜ!!」

「おー！！」

中学校生活最後のイベントに向けて、僕らは今、走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5848y/>

デイリーメイカース

2012年1月12日20時59分発行